

アントニーノ・フェロ [著]
吾妻 壮 [監訳] 小林 陵, 吉沢伸一 [訳]
物語と治療としての精神分析

金剛出版・A5判上製
2023年11月刊行
4,400円 (税込)

評者=福本 修
(長谷川病院/代官山心理・分析オフィス/きしろメンタルクリニック)



本書は、ユダヤ系イタリア人精神分析者 Ferro による著書の、初めての邦訳である。彼は十数冊の単著・編著を公刊しており、そのほとんどは英訳されている。訳書で原題の Psychoanalysis as Therapy and Storytelling の順が、「物語と治療」へと入れ替えられた事情は不明だが、実際に本書は、多くの臨床素材と小説・映画・ドラマからの物語で溢れている。イタリアを超えて世界的に活躍してきた彼の記述には、子どもや若者との治療の場合に限らず、1947年生まれという年齢を感じさせない若々しさがある。

彼の仕事は、Baranger 夫妻のフィールド理論・Bion のアルファ機能論・Propp 以後 Eco に至る語りの理論などを基盤にして、それらの緊密な絡み合いの中から生まれている。関心がフィールドに向かうことで、治療の焦点は単に患者の内的世界でも治療者の逆転移でも、両者の関係に限定されたものでもなくなる。フィールドはそれらを超えて、患者が持っている「病氣」に「感染」してそれを引き受けることが期待される。そこに意味を見出すのは、ベータ要素に働く Bion のアルファ機能である。その意味は、ナラティブ変形を通じて患者の歴史の一部となる。テキストは、分析者と患者の間で起きている現在の相互作用の機能であり、両者が分析的な設定の中で命を与える情動的フィールドの機能である。だからフィールドとは、Ferro によれば、「ありうる物語の母体」である。本書の百近い素材＝物語は、Ferro というプリズムを通した、ナラティブ可能態スペクトラムであり、読者はその広がり to 感銘を受けることだろう。

その具体的なところは実際にお読みいただくとし、Ferro と Bion の諸理論との関係を確認しておきたい。Bion のベータ要素・アルファ要素・アルファ機能・夢想といった概念を駆使し、第3章では「C行を讀えて」グリッドを掲げている彼は、明らかに Bion に親和性を感じている。クライン派による無意

識的空想の解釈が意味を飽和させがちだとしたら、Ferro も Bion もそれに同意しないということで一致するかもしれない。ただ、その先はかなり異なりそうである。Ferro のやり方は、夢想を駆使するという点ではポジティブ・ケイパビリティの行使である。それは、「記憶なく欲望なく」という心の状態を推奨した Bion とは異なる（この二語は、本書の主題ではない）。それによって Bion は、単に心の未飽和状態を推奨したのではなく、ベータ要素を立ち現われさせようとしている。しかし Ferro が扱っているとするベータ要素は、実際にはほとんどアルファ要素化しているものに見える。また、プリズムはあらゆる物語を並列に析出させるが、そこでは精神病理も特性も明示的には顧慮されていない。しかし、例えば第6章「妄想と幻覚」で詳しく提示されている事例マウリツィオにあるのは、発達障害者の思い込みであって、精神病性の妄想とは異なるのではないだろうか。

事例を読むと自然にさまざま疑問や考えは湧く。本書の多くの局面で、行き詰まりや危機は Ferro の機知や南欧的な明るさによって救われているようである。本書が、Ferro の仕事さらには最近のイタリア精神分析の動向が紹介される端緒となれば幸いである。